

Ⅱ-01.なぜ、英語を学習する必要があるのか

ひとつは、世界の情報を入手するため、もう一つは、

世界へ「物・事・考え」誤解無く伝えるための道具が必要であるからだ！

この道具を手に入れるには英国・米国の文化と切り離された、オープンイングリッシュを真似ればいい。そのオープンイングリッシュを真似るには、その前に日本語で論理的に考え、論理的に表現する訓練をしておく必要がある

オープンイングリッシュ「Open English」とは、アングロ・サクソンの民族的文化や、英国やアメリカ国の社会的文化の影響をできるだけ取り払った言語を指すことにする。

英語がその位置を占めるようになったのは、世界の汎用事項を語る必要がある人にとって、共通言語が一つ必要であるという需要が推進力となった。英語はこの需要に応えられる二つの要素を有しているからだ。

一つは、自然科学や高度な概念を表現するために、ラテンの言葉を無数に取り入れて、言語としての完成度を高めてきたこと、もう一つは、英国という狭い地域の中だけで発達してきたのではなく、新大陸アメリカにも持ち込まれた言語であること、簡単にいえば、この数百年の間に文化的な臭いが薄められてきた言語である。

つまり文化も民族も異にする人々の間で互いに通じ合うためには、どのようにすれば良いのか、鍛えられてきた言語であるということだ。反面、無味乾燥な言語ということにもなる。

さらに言えることは、我々日本人は、言語に無神経、あるいはその重要性を認識しないで済んでいる。これは、島国で日常的に多言語に接しなければならない環境にないことが、その要因と考えられる。日本の外に一步出ると誰も理解できない不明瞭な日本語で、発明から製品まで、生産方法から社会システムまで、記述しているがために、日本国家として、企業として、日本は莫大な損失をしていると思う。



II-02 英語の処理手順(OS)を組み込む

語学能力を含めて、能力と総称されるものに、
四つの種類があると考えられている

1. 「talent」:もって生まれた才能。例えば言語習得能力が極めて高い人が、少数ながら、確かに存在する。
2. 「skill」:主として体で、時間をかけて身に付けていく、技能的な能力。
3. 「faculty」:頭で理解して、習得し応用する能力。
4. 「ability」:環境適応能力。自分が置かれた環境に適応し、自分の力を発揮できる能力。

faculty から ability へ

人が母国語を修得していくのと同じやり方で外国語を習得しようと試みるなら、膨大な時間を費やさねばならない。外国語としての英語を、効率的に習得するためには、先ず頭で、その原理を理解する必要がある。同時に、自分の置かれている環境を理解し、どのような分野、仕事において、なぜ習得しなければならないか、を絶えず意識して習得作業に取り組む必要もある。このような理解と作業を、OSの組み込み(インストール)と呼ぶことにしている。

インストールから稼働へ

原理や処理手順を組み込んでも、稼働させなければ動かないままで終る。絶えることのない訓練がそこには要求される。北辰一刀流の千葉道場でいくら合理的に剣術を習っても、毎日竹刀を振る稽古をしなければ、とても試合や実戦に出られるものではない。読む、聞く、書く、話す訓練は欠かせない。しかし、SLE 塾で使う英語OSインストールマニュアルは、OSの組み込みまでとしている。訓練は、別の教科、教材の課題である。



II-03.グローバル世界での戦いは、英語である

これまでに述べてきょうに、世界で唯一の共通語は英語であるから、オープンな世界、例えば特許等の知的財産の世界で闘うには、英語でやりあうしかない。試合の規則は、残念ながら、英語に基づいており、その英語は西欧の思考方式に土台を置いている。力関係からみても、日本語の特異性から見ても、日本語が世界のルールになる可能性は無い。

—では、どう闘えば良いのか—

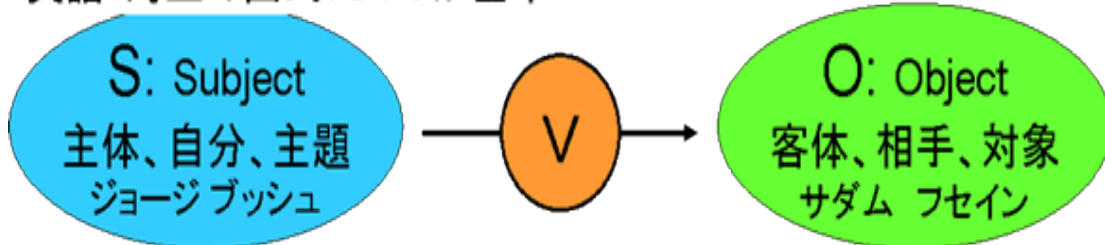
まず注意することは、相手が定めたルールで闘う時、相手のやり方を丸ごと取り込んでしまう危険性があることだ。

- 1). 例えば日本語より英語の方が優れていると思込む、考え方まで相手の方式、ここでは西歐式、になってしまうなどの極端な例もある。
- 2). この場合は、自ら進んで、自己の存在確認証明を放棄してしまっていることになる。言語と思考方式が表裏であるだけに、言語を習得する、利用する時の危険性は常に存在する。
- 3). また、表裏であるだけに、異なる思考方式の上に言語だけを取り替えて表現することは、多くの場合理解されえない結果となる。
- 4). 純日本風思考方式の上に日本語で表現されたものを、形だけ英語に変換しても、他国の人には、特に、考え方の違いが存在することに不慣れな米国人には、何が主張されているのかは、理解されない。
- 5). 自分を失うことなく、ルールは英語式で闘うには、試合に臨むときだけ、普段の方式、つまり自分のオリジナル方式を、一時しまっておいて、意識的に、人工的に作り出した処理装置で、つまり英語OSを稼働させて処理するしかないと考えている。

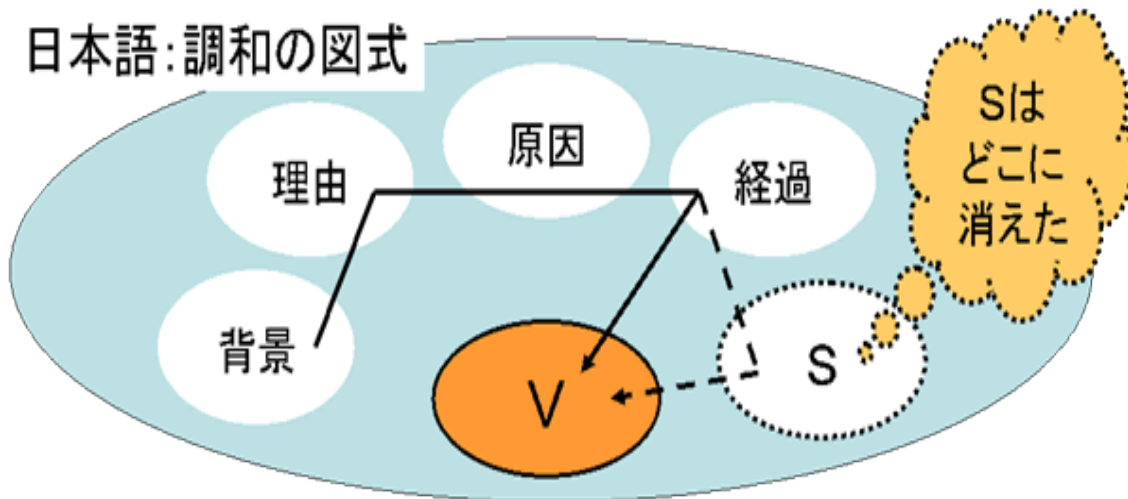
(*) 下図にある、「ジョージ ブッシュ」と「サダム フセイン」は、湾岸戦争当時の米国とイラクの指導者である。

真昼の決闘型とドタキャン型

英語: 対立の図式: SVOが基本



日本語: 調和の図式



II-04.「文明英語」に慣れることからスタートする

既に述べてきたが、英語を学習するときに、なぜそのような表現方法をとるのか、なぜそのような言い方をするのか、を理解することが基本である。文化としての英語を学ぶなら、話は別である。しかし、文化に密着した言語が簡単に外国語として学習できるわけではない。

技術は、その原理、法則を頭で理解することができれば民族、文化の違いに関係なく、人類の誰もが修得できる。つまり、普遍性があり、その意味で「文明」と言える。世界の共通言語である英語も、開かれた国際言語として標準性・普遍性が高く、好むと好まざるに関係なく、一つの文明と言えほどのものになっている。英語が一つの文明であるならば、標準性、普遍性は日々強まる。

それは、英語を学ぶ意欲さえあれば人類の誰もが理解しやすく修得しやすい言語構造になっていることを意味する。

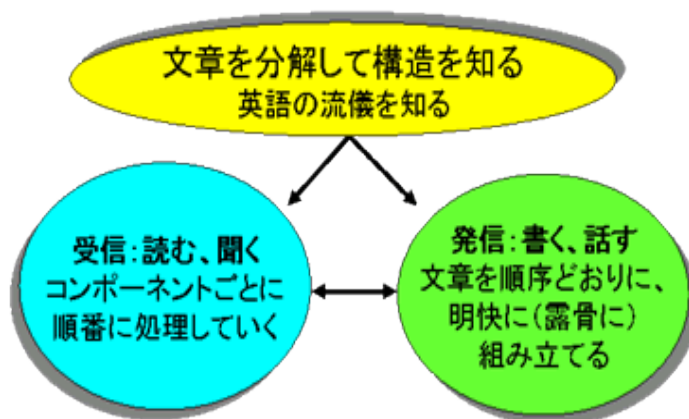
もちろん一つの言語であるから、どこまで行ってもその文化の根っこは消えない。しかも意思疎通の手段として使う人の数が、増え続ける限り、文化の香りはどんどん消えていく。言語構造(体系)が明確な英語は、標準性・普遍性・開放性を高めて行くことは間違いのない事実である。

例えば、特許仕様書(Patent Specification)は、発明技術を言語で表現したものに対して、その権利が与えられる。文明である技術を、言語で権利主張するためには、文明である英語で表現するしかない。

世界の中で、ほんの少数しか理解できないフランス語や日本語で表現されているのは、普遍性は得られず、従って普遍的な権利主張はできないことになる。ここにおいて、英語を母語とする人々は圧倒的に有利であり、英語と同じ言語体系の西欧の人々はまだしも、まったく体系の異なる日本語を母語としている我々日本人は、極端なまでに不利な条件を強いられていることになる。

どんなに長文でも文節ごとに分解してアタマからそのまま読む

効率的に英語をマネージする



早く正確に読め、書けることにつながる



II-05.英語学習で求められる論理力

論理思考で物事をつきつめ、それを論理的に表現する訓練がされていないのに、英語を勉強しろと迫られても、それは酷な話である。なぜなら頭の中で論理思考が育っていないところに、英語を身につけろと迫られることは、二重の苦難を強いられることになる。そのため、結果としては、英語も身につかず、母語である日本語で論理的に表現することもできない「日本人」がたくさん出てくることになる。

—論理的文書を作成するためには、二つの要素が欠かせない—

ひとつは、論理的に「文書」を構成(展開)することである。

もう一つは、論理的に「文章」を記述することである。

日本人が作成する日本語文書が英語へ翻訳できない場合が多い。この原因は、上記二つの要素が適合していないからである。特に、文書を論理的に作成するという「建築」訓練を受けていない人が案外に多い。

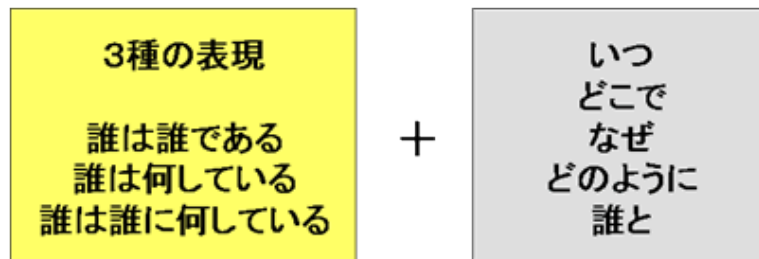
英文の構造に馴れる

- | | | |
|----------------|-------|----------|
| 1. <u>大まかに</u> | 述べてから | 詳しく説明 |
| 2. <u>抽象的に</u> | 述べてから | 具体的説明 |
| 3. <u>結論を</u> | 述べてから | 理由/背景を説明 |
| 4. <u>主唱を</u> | してから | 理由/背景を説明 |
| 5. <u>事実を</u> | 述べてから | 状況/理由を説明 |

文章の分解・組み立て

5W1Hを常に意識する

概念、事実の論理関係を明快に記述すること



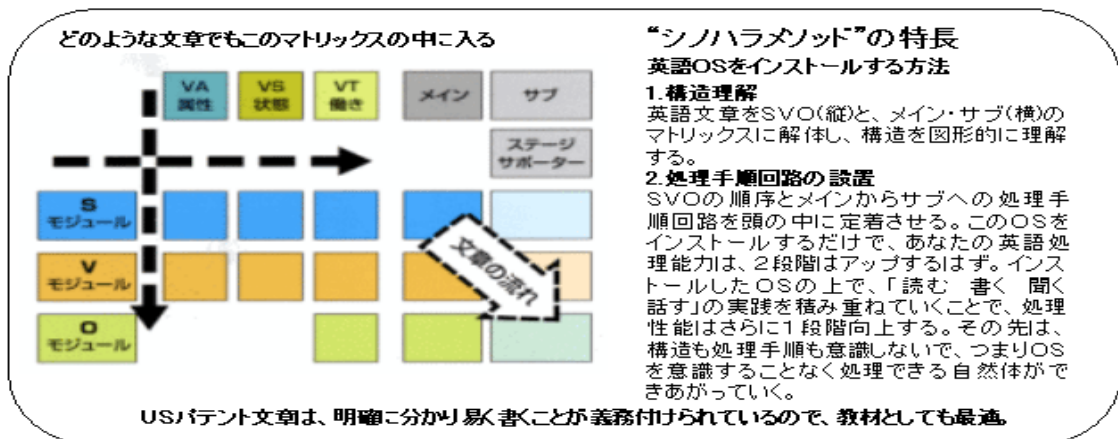
II-06.日本人に効果的な英語学習のやり方

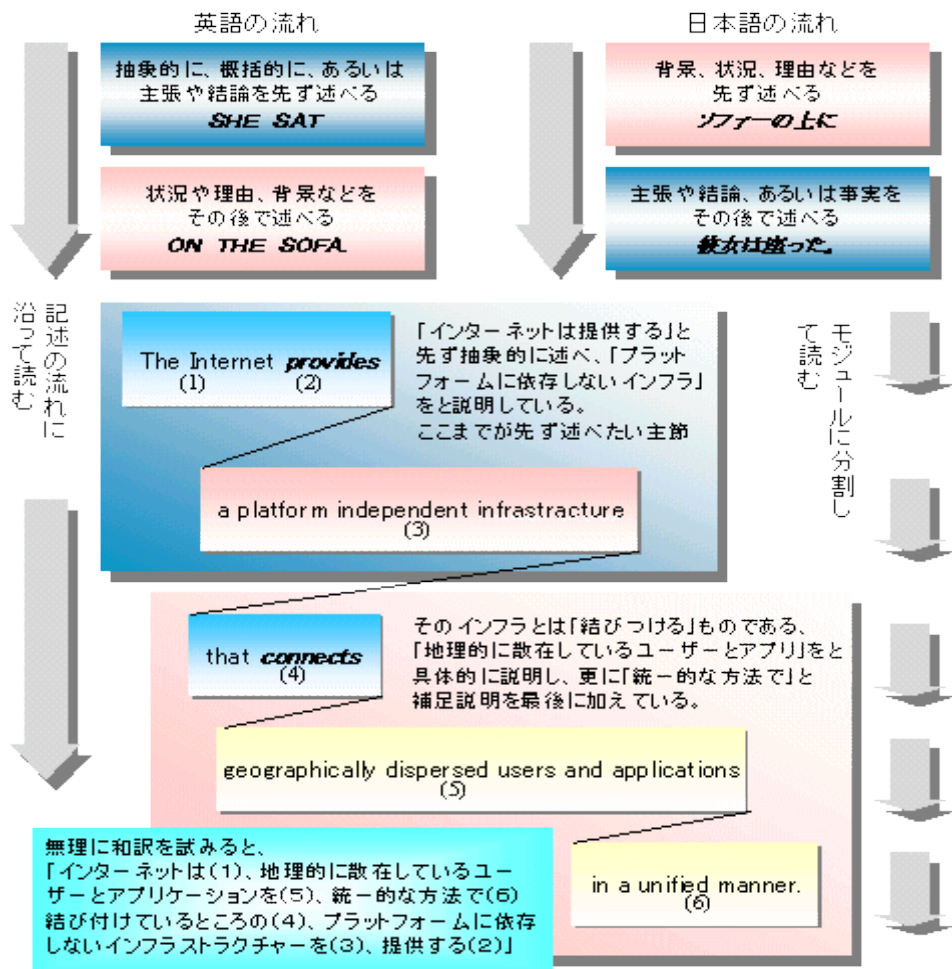
思考方式と言語は表裏の関係であるから、考え無しに別の言語を頭の中に取り入れると、混乱をきたして、思考方式、思考力そのものまでも壊しかねない。その人の他者に対しての存在証明、自己に対しての存在確認の一つは、母国語である言語であるから、母国語の土台を侵食しかねない外国語の取り入れは避けなければならない。一方、世界の中で存在し、あるいは企業という集団で闘うには、共通語である英語を扱えるようになる必要がある。それでは、どうすればよいのか？

英語OS(オペレーションシステム)をインストールする

乱暴な意見に聞こえるかも知れないが、解決策としては、頭の中に、日本語とは別に
もう一つ、英語を処理するオペレーティングシステムを搭載するしかないと思う。日本語OSの上で、日本語と英語という二つのウインドウを開いて処理しようとしても、二つの言語の間での変換処理は極めて難しいものになる。処理するのに時間をかけることのできる、「読み書き」の場合はまだしも、リアルタイムで処理しなければならない、「聞く、話す」場合には、余程、高速大容量の並列処理機能でも持たない限り、変換処理は追いつかない。

それ以上に、受信の時には、日本語風に(自分の都合のよいように)理解してしまう(理解したと思い込む)危険性、発信の時には、日本語風の表現となり、相手に誤解させてしまう(あるいは理解されない)危険性がこのやり方には潜んでいる。相手の意図するところを見抜けなければ、戦いは負ける。当方の言わんとするところが伝わらなければ、せっかくの努力も無駄になる。





Ⅱ-07.英語学習の基本は、英語文章の構造を理解すること

英語OSを頭の中に組み込む作業の第一は、英語文章の構造を理解するところから始まる。構造を静的に把握し、自分で表現する時には構造的に構築するように心がける。

(1)SVOに分ける

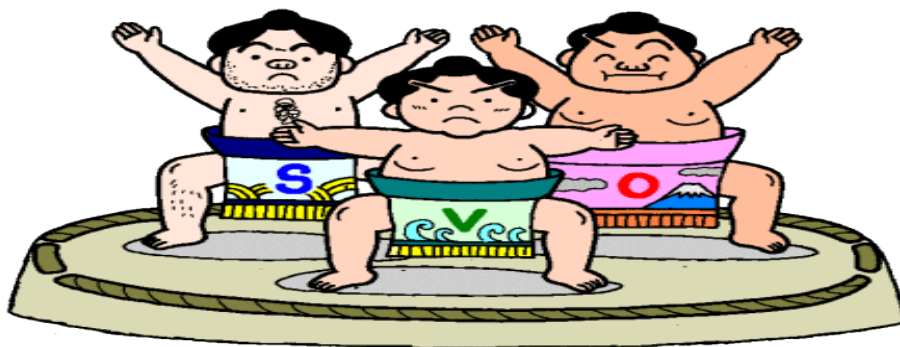
英語は、ご承知のように、Subject(S)－Verb(V)－Object(O)で構成される。これらを、モジュールという単位でひとまとめにくる。*SVO は、英語の基本文法

(2)骨格を確認する

英語の文章は、骨組みを構成する SVO それぞれのプレイヤーとそれらを修飾するサポーターで構成されている。プレイヤーの役割は、「S が V する O を」の基礎を述べることにある。サポーターの役割は、それぞれを、「どこで、いつ、どのように、なぜ」を具体的に説明補足(修飾)することにある。プレイヤーとサポーターの存在を区別するためにも、モジュールの中をさらにコンポーネント単位に分割する。

(3)手法を実行する

モジュールとコンポーネントに分割したものを、縦に並べる。これにより、先ず、構造、つまり基本の骨組み(プレイヤー)とその装飾部(サポーター)の組合せが、はっきりと見えるようになる。



*モジュール、コンポーネントという概念と縦に並べる手法は、SLE 塾のオリジナル

*英語は主部と修飾する者たち(modifier)に分けられるということは、次の教科書から引用
「Basic Grammar for Writing」Eugene Ehrlich McGraw-Hill

II-08.表現の内容は、「属性・状態・働きかけ」

1) Subject(主体)の属性表現:

Subject の固有の質、永続的な姿、概念など、その属性を表現する。自分は何者であるかの宣言は、西欧文化においてもっとも基本的な事項であるから、属性表現はもっとも基本的な表現分野とすることができる。

(*) 中学1年で習う最初のセンテンスは、“I am a boy(属性).”.

2) Subject の状態表現:

Subject がどのような状態にあるのか、何をしているのか、などが表現される。状況の正確な観察とその報告は、上級者(軍隊では士官)の基本任務であるから、基本の事柄の明示とそれに付随する詳細説明の分けは、重要度の高いものから先に述べるという順序を含め、基本要綱である。

(*) 客観的な状況観察報告と、表現者の主観に基づく報告の区別は難しい課題である。

3) Subject から Object への働きかけを表現:

主体とそれに対立する客体という図式は、西欧文化の基本姿勢であるから、「Sが行うーOをーOに」という関係式を明確に示すことはきわめて重要な、基本的な事項である。(*)この関係をあからさまに表現することを控える日本文化の慣習が、色濃く残ったまま英語で表現すると、何がどうなっているのか明瞭でないとして、理解されないおそれがある。

		主題・主体	属性・修飾・目的語	動詞	
骨組	属性・定義	サブジェクト Subject Matter は	このような属性	である	です
	状態 ・ 自立行為		このような状態 このような関係 このような動きを	にある している	あります
	働きかけ		何々を 何々に	する	します
詳細説明	3W1H	whyなぜ、whereどこで、どこからどこへ whenいつ、howどのように			

II-09.表現の順序は、モノを観る時の順序

表現の順序は、モノを観るときの順序であり、考える順序でもある。また、表現の順序は、同時に受け手の処理の順序でなければならない。すでに述べてきましたように、英語と日本語の順序の違いが、日本人が英語を苦手とする最大の要因となっている。

処理の手順が大きく異なるものを、一種類のOSで処理しようとする、大きな負荷がかかり、ひいては処理装置が拒絶反応を示すことになりかねない。英語を言語として受け止めるためには、その順序のまま処理する必要があり、また、その順序で表現しないと、相手にコンテンツが伝わらない。

英語による表現の順序には、三つの特徴がある。

(1)SVO の順であり、これは変更できない剛構造である。

(*日本語は、最後にVをもってくる鉄則さえ守れば、その途中の順序は自由にできる柔構造である。Vが末尾であるからOVの順序は変えられない。

(2)具体的説明(サポーター)の出番は、主たる記述(プレイヤー)の前と後ろと両方あり、統一性は欠けている。

(*多分、オリジナルの英語は基本が前置で、後に、ラテン語の影響を受けて、後置が流行となったと思われる。長い説明群は後ろに位置するのが標準である。

(*日本語は、すべて、説明してから主部(プレイヤー)がでてくる。

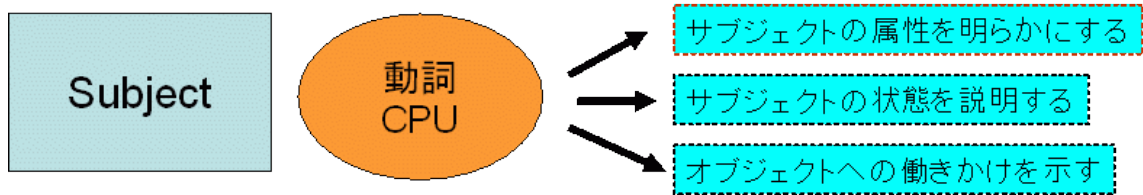
(3)重要なこと、主張したいこと、出した結論、これら先頭に出し、次いで重要度の順に説明を付け加えていく。

(*日本語は、枝葉末節の説明から次第に肝心点に進んでいく。

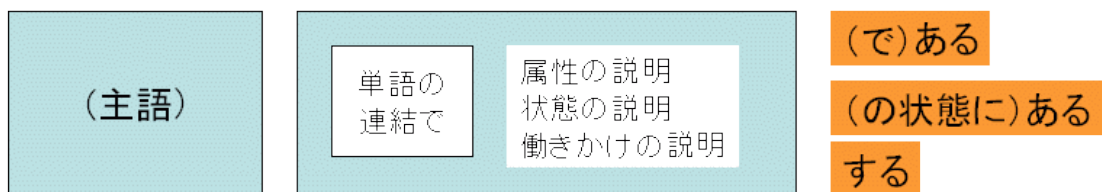
英語の順序のまま処理できるOSを頭の中に設置しない限り、つまり日本語処理の手順で対応している限り、たとえ何千時間英語と取り組んでも、言語としての英語は身に付かないおそれが極めて大きい。

何を表現するのか、軸になって取り仕切るのは、動詞である。動詞がすべての文章の基本柱であり、これを基軸に三つの分野の表現が展開される。

英語は動詞が中央処理装置



日本語は単語の連結で説明する



*なんとなく分かったような気がする



II-10.英語文章を「3*3方式」で、

切って、切って、切りまくる

英語の文章をモジュールとコンポーネントに分割し、それを縦に並べて表示すると、驚くほどその構造と流れが見えてくる。英語を母語とする人が見れば、ナンダコリヤと笑うかも知れない。

しかし外国語として対処する者にとっては、特に、表現の順序がこれほどまでに違う日本語を母語としている我々日本人にとっては、自分の都合(表面上)の良いように、加工して対処することに不都合はないはずだ。

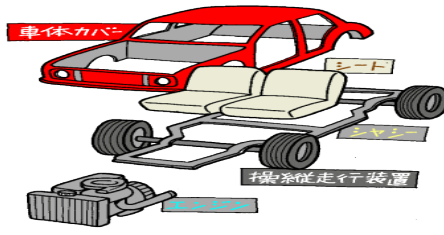
英語を母語とする人、あるいは英語と同じ言語体系に属する西欧語を母語とする人にとって当たり前の、ページ一面にベタ書きされた文章に、我々日本人が汗水流して取り組まねばならないいわれはないはずだ。なぜなら表面加工をしても中身が変わるわけでもないからだ。

同時通訳の訓練でも

分割し縦に並べると、II-06にある図(篠原メソッド図)に示したような利点がる。文章に対応する時には、視覚による支援が得られる。さらには、この区切りに慣れると、聞き取りの力も大幅に向上する。モジュールとコンポーネントという概念は言われていないが、語られるセンテンスを固まりに分けて、そのブロックごとに処理していくやり方は、日本で、同時通訳の訓練方法として昔から採用されていると聞いている。語られる場合も、頭から終りまで一気に区切りもなく話されることはないので、区切りごとに捉えていくやり方が聴き取り向上に役立つことは、ここからも証明されているといえる。

表現に向けて

さらに、コンポーネントごとに組み立てていくことが、確かな構造で構築し、英語の順序で書き、話すという表現力の向上につながっていくことになる。



Ⅱ-11.自分で表現する(文章を構築する)場合の

基本ステップを考える

(1)主題を定める

Subject は何か、つまり、何について表現するのかを確認する。Subject には「主題」という意味もあるから、その文章の主題を定めること、とも言える。

(2)叙述の種類を定める

Subject の何について表現するのかを確認する。属性・性質について述べるのか、状態を説明するのか、Object に対して何かをするのか。

(3)骨組みを作る

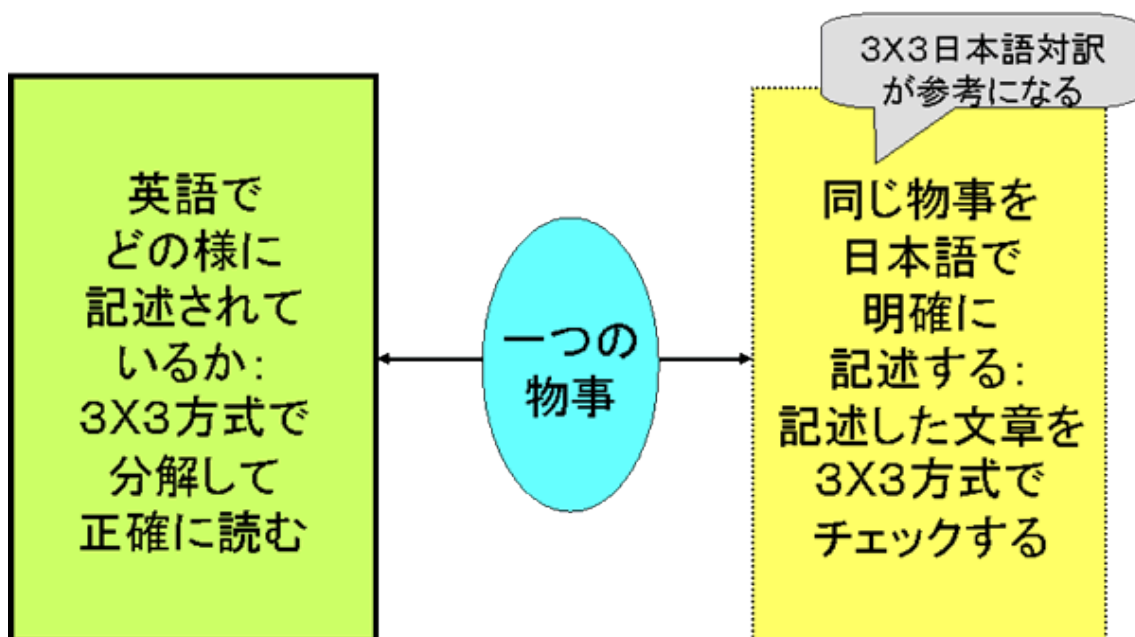
土台になる言葉の周りに、必要な最小限の言葉を付けて、基本となる意味がまとまり、文章として成立する最小限の構成を形づくる。

(4)枝葉をつける

伝えるべき意味を、明確に、具体的にするために、必要な説明を付け加える。小説や新聞記事などでは、この部分で表現の腕前を示す技巧(修辞)がほどこされるが、各種仕様書など、技術文書の場合は、何がどうなっているのか、どのような動作をいつ、どこで、なぜするのかなど、概念や事柄の明確化がこの仕上げの段階での課題となる。

なんだか硬苦しい方法を示したが、土台の思考方式も表現順序も大きく異なる英語で、明確に表現するためには、このようなステップでの確認と、実際に書く訓練の積み重ねは欠かせないと思われる。

どのように学習するか



篠原メソッドの 目からウロコを10枚はがす 講義構成

